近代日本に於ける『警世通言』巻32
「杜十娘怒沉百寶箱」の受容について
―今東光訳「珠を擲つ（杜十娘）」(1926）を中心に―

勝　山　　稔

要　旨

本論では、作家・今東光による「三言」所収篇の翻訳「珠を擲つ（杜十娘)」を分析し、先行研究の欠を補完した。今東光は大学の研究者ではないが、特殊な白話表現を的確に理解しており、当時の翻訳水準に比べて極めて完成度が高かった。その要因は二つ考えられる。①本翻訳所収の『支那文學大觀』の出版構想に「芸術と学術の統合」があり、原文註釋担当として大学研究者が参画したこと。そして②『今古奇觀』註釋を担当した拓殖大学教授・宮原民平は豊富な中国現地体験を持ち、当時の大学研究者の中でも卓越した白話の理解能力があったことが、同作品の翻訳水準の向上に繋がったものと思われる。

【キーワード：宮原民平 / 今東光 / 支那文學大觀 / 今古奇觀 / 警世通言】

はじめに

筆者は、中国通俗文学の日本受容に関する研究の一環として、明治時代以後の明代短篇白話小説「三言」(『古今小説』『警世通言』『醒世恆言』）の翻訳に関する事例研究を試みている。これまでの研究では明治・大正時代における翻訳事例を検証してきたが、本稿では、明代短篇白話小説集『警世通言』巻32（及び「三言」の選集『今古奇觀』巻５）に収録される「杜十娘怒沉百寶箱（杜十娘怒りて百寶箱を沉むること)」を検討することとしたい。

中国通俗文学の日本伝播は18世紀前後から本格化する。そのため筆者は江戸期の唐話学者や明治以降の支那愛好者による翻訳の発掘と分析を試みている。その理由は、これまでの先行研究が大学の研究者が手掛けた学術的翻訳の検討に集中し、それ以前に民間で行われていた翻訳の模索の殆どが軽視あるいは無視されてきたからである。

中国通俗文学の受容の歴史は既に三百年以上にのぼるが、その歴史の中で民間人による翻訳の試みは無視できない。それは江戸時代に中国白話小説から強い影響を受けた読本が流行したほか、現在の日本でも『西遊記』や『三國志演義』『水滸傳』などの中国白話小説が、深く人口に膾炙しているのは、江戸時代から戦後にかけて連綿と続けられた民間人の手による翻訳（以下「民間翻訳」）に負うところが大きいからである。

しかし、これら民間翻訳の出版活動は、その実態が殆ど判っておらず、本格的な分析は一部の

作品に限定されているに過ぎないのである。

そのため筆者は、中国通俗文学史上、重要な位置にある白話小説集「三言」や、その選集である『今古奇觀』に注目し、民間翻訳の発掘とその検討を継続的に行っている。

以下小論では、大正時代の文学叢書ブームに便乗して大々的に刊行が開始したものの、経営悪化のため中絶した『支那文學大觀』シリーズの中から、刊行停止前に出版にこぎ着けることができた第11巻『今古奇觀』を取り上げる。そして本書の中で異彩を放っているのが、当時新進の青年小説家であった今東光による翻訳「珠を擲つ（杜十娘）」である。以下本論では彼の翻訳を取り上げ、民間による「三言」受容の一例を紹介・分析し、先行研究の欠を補うこととしたい。

一　今東光訳「珠を擲つ（杜十娘）」について

（１）収録書籍『支那文學大觀』について

今東光訳「珠を擲つ（杜十娘）」を論じる上で、収録された書籍、そしてその叢書の性格を説明する必要があろう。

學術と藝術の綜合
全十四卷の提供
原文註釋
現代語譯
支那文學大觀
豫約募集
豫約締切
一月三十日
監修
執筆者
原文
譯文
卷頭論叢
内容見本
申込所
支那文學大觀刊行會
東京市本郷區西須賀町五番地
内容見本
進呈

『支那文學大觀』予約広告（朝日新聞1925年12月28日朝刊第１面）

『支那文學大觀』(支那文學大觀刊行會刊）は、1926年３月から1927年４月まで刊行が行われた中国の戯曲小説の邦訳に特化した文学叢書である。

『支那文學大觀』内容見本に掲載された「支那文學大觀刊行會規定」の「刊行期日」によると「大正十五年三月より毎月一册づつ刊行十四ヶ月を以て完了す」とある、つまり、当初の計画では、昭和２年５月に全14冊の配本を完了する予定であったが、全体の約６割にあたる９巻を刊行した時点で刊行会は突然出版を停止、叢書の企画は完遂することはなかった。既刊分９冊の刊行状況は下掲の通りである。

① 第12巻　（聊齋志異）　大正15年　３月31日
② 第５巻　（桃花扇・上）　大正15年　５月18日
③ 第10巻　（剪灯新話・剪灯余話）　大正15年　６月30日
④ 第11巻　（今古奇觀）　大正15年　７月29日

⑤ 第８巻　（唐代小説）　大正15年　９月22日
⑥ 第４巻　（風箏誤）　大正15年　10月25日
⑦ 第６巻　（桃花扇・下）　大正15年　11月30日
⑧ 第２巻　（牡丹亭還魂記・上）　大正15年　12月15日
⑨ 第３巻　（牡丹亭還魂記・下）　昭和２年　４月15日

このように当初計画では全14巻の刊行を予定していたが、経営悪化のため９巻で出版廃絶となり、古典小説のジャンルでは『京本通俗小説』が未刊となったものの『唐代小説』『剪燈新話』『今古奇觀』『聊齋志異』は刊行されるに至った。そして本論で扱う『今古奇觀』(1926年７月刊）は全40篇中５篇の翻訳であったが、それでも『今古奇觀』の本格的な翻訳としては本邦始めてであり、後の井上紅梅訳『今古奇觀』(1942）[1]、魚返善雄訳『中國千一夜（今古奇觀現代語訳)』(1952～53）[2]よりも約20年前後早く、しかも原文も併載した上に宮原民平による註釋が加えられるなど充実した内容になっている。

（２）翻訳者・今東光について

また、「杜十娘」の翻訳であるが、当時新進気鋭の小説家であった今東光[3]が担当している。今東光（1898～1977）は、中尊寺貫主として瀬戸内晴美に「寂聴」の法名を与えた僧侶として知られているが、若い頃から漢文に長け、佐藤春夫や芥川龍之介、川端康成と知遇を得ていたことでも知られる。彼は谷崎潤一郎の私設秘書を務めながら、芥川の薦めもあり東京帝国大学で行われる鹽谷温の中国古典の講義を聴講したほか、川端の推薦により、第６次「新思潮」の発刊に同人として参加、1924年に発表した「朱雀門」が高く評価され、新感覚派文学運動の作家としての地位を得た時期であった。

今東光 青年期肖像
（今東光資料館 提供）

このように今東光は相応の漢文の知識を持っていたと思われる。しかし、なぜ小説家が『支那文學大觀』での翻訳に参画したのか。この点は些か疑問を抱かざるをえないが、これは本叢書が持つ独自の企画――大学の研究者と民間の文学者が共同して語釈翻訳作業を実施するという構想によるものだからである。

筆者は2015年、支那文學大觀刊行會が出版に際して配布した『支那文學大觀』内容見本（全22頁）を神保町の古書肆で発見した。その冊子には「支那文學大觀刊行に就いて」という一文があり、本叢書をなぜ企画したのかという刊行目的が詳しく述べられている。それには、

> 支那文學の藝術的價値は既に早く具眼の士に認められてゐたが、其の數に於て、亦其の質に於て、斷じて西歐諸國に劣つてはゐない。一般的に普及しなかつたのは、要するに字句が

難解なのと、西洋禮讃の迷夢に歸すべきである。若し信頼するに足る研究書と、親しみ易い飜譯書に接することが出來れば、恰も支那料理の如く世人一般から迎へられるに違ひない。……斯うした、靴を隔てて掻くやうなもどかしさを除去して、完全に我々のものにしたいといふのが、支那文學大觀の企である。學術と藝術とを綜合して、藝術の香高い現代語譯を得ると共に、原文を示して、之に嚴正な註釋を施し、研究の指針に供するのが刊行の主旨である。

とあるように、中国文学が世間で普及しない原因は、字句の難解さにあるため、親しみやすい翻訳が必要であると考えている。そのため高い学術性を担保しつつも、支那愛好者の中から当時一級の文学者を翻訳に投入したのであろう。そのため、文学者側では芥川龍之介、谷崎潤一郎、佐藤春夫、木下杢太郎[4]、田中貢太郎[5]など錚々たるメンバーが並んでおり、今東光も新感覚派同人の川端康成や鈴木彦次郎[6]と唐代小説の翻訳を共同で担当[7]したほか、清代の長編戯曲作品である『桃花扇』の翻訳を一人で手掛けている所からも理解できる[8]。

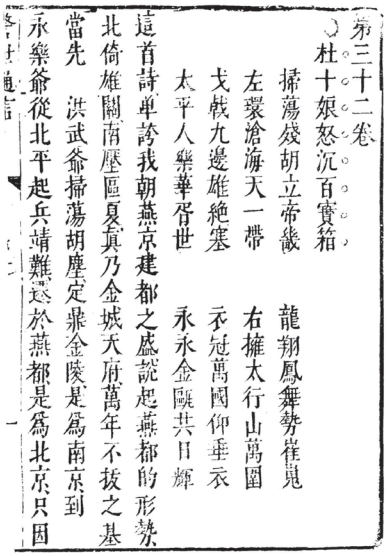
このようにして本叢書の翻訳は文学者の手によって行われたが、支那文學大觀の冊子表紙にも「創作家の現代語譯　學究者の原文註釋」とあるように原文の註釋は大学の研究者が担当している。そのため本企画には鹽谷温[9]、宮原民平[10]、竹田復[11]、公田連太郎[12]が参画しており、『今古奇觀』の原文註釋は拓殖大学教授の宮原民平が、そして『唐代小説』と『桃花扇』の原文註釋は東京帝国大学教授の鹽谷温が担当している。

（３）受容史上における今東光訳の位置付け

「三言」所収篇における今東光「珠を擲つ（杜十娘）」の受容史上の位置付けであるが、これは下掲の時系列を確認すれば明白である。「杜十娘怒沉百寶箱」（『警世通言』巻32・『今古奇觀』巻13）に関する事例は、以下の通りである。（△は訓読翻訳、○は民間翻訳、◎は大学研究者による翻訳、□は原文翻訳に基づいて小説化された作品[13]である）

△　服部誠一『歡懲 繡像奇談（第一編）』（九春社、1883）
○　鈴木眞海「杜十娘」『鴛鴦譜　外三種』（支那文獻刊行會、1925）
○　**今東光「珠を擲つ（杜十娘）」（支那文學大觀刊行會、1926）**
◎　魚返善雄[14]「持っていた女」（日本出版協同、1953）
□　林房雄[15]「遊女物語」『女読むべからず　冬の夜話』（河出書房、1955）
◎　千田九一（中国古典文学全集訳）（平凡社、1958）
◎　千田九一（東洋文庫訳）（平凡社、1965）

小論で扱う「杜十娘怒沉百寶箱（以下「杜十娘」）」の受容の歴史を略述すると以下の通りである。


第三十二卷
杜十娘怒沉百寶箱
掃蕩殘胡立帝畿　龍翔鳳舞勢崔嵬
左環滄海天一帶　右擁太行山萬圍
戈戟九邊雄絶塞　衣冠萬國仰垂衣
太平人樂華胥世　永永金甌共日輝
這首詩單誇我朝燕京建都之盛說起燕都的形勢
北倚雄關南壓區夏其乃金城天府萬年不拔之基
當先　洪武爺掃蕩胡塵定鼎金陵是爲南京到
永樂爺從北平起兵靖難遷於燕都是爲北京只因

蓬左文庫所蔵『警世通言』
（金陵兼善堂刊本）

「杜十娘」が著録されている『警世通言』や、その選集である『今古奇觀』の日本伝来は、江戸時代に遡ることができる。例えば長崎書物改役（あらためやく）による『商舶載来書目（しょうはくさいらいしょもく）』（1804）によれば、本作品所収の『警世通言』[16]は寛保３年（1743）に、同じく本作が収められた『今古奇觀』は享保16年（1731）に長崎へ舶来した記録[17]が確認できる。また江戸時代中期の儒者・田中大観（たなかたいかん）が黄檗僧（おうばくそう）から唐話を学び白話小説や雑劇などを考証した『大観随筆（たいかんずいひつ）』に「嘗觀小說名警世通言」という記述が見られることから『警世通言』は大観の没年である1736年以前に日本に伝わったと推測できる。そのため確証は得られないものの『商舶載来書目』の記録以前に、古義学を標榜した儒学者による白話小説の入手や通読の記録が残っている事実から、「杜十娘」及び「杜十娘」所収の『警世通言』も他の「三言」所収編と同時期に日本へ伝来していた可能性が考えられる。

本作の翻訳であるが、現時点で確認出来る明治時代のものには、服部誠一『歡懲繡像奇談』（九春社、1993）がある。服部は本書の中で『今古奇觀』巻１・５・16・35の翻訳を紹介したものの、それは江戸時代以来続く唐話学的な訓読翻訳であり、かつ誤字や誤訳も多い[18]。そのため、実質的な邦訳の出現は1925年５月の鈴木眞海による翻訳[19]まで待たなければならなかった。

今東光による翻訳の刊行は1926年７月であり、２ヶ月前に出版された眞海訳を入手できた可能性はある。しかし、少なくとも今東光の取り組みは、参照すべき先行する翻訳が乏しい状況下での訳業であることに変わりはない。

それでは、今東光の翻訳はいかなるものであったのか。また眞海訳と比較して何が明らかになるか、これまでの先行研究では一切検討されたことはないので、その関係も含めて分析を行うこととしたい。

二　今東光「珠を擲つ（杜十娘）」の翻訳状況について

「杜十娘」は、現在でも京劇の演目や映画など各種媒体で作品化[20]されており、「三言」所収篇の中でも代表作と呼ばれている。そのあらすじは下記の通りである。

万暦年間のこと。太学生李甲は教坊司院内の美妓杜十娘と相愛の仲になった。塵界から足を洗いたかった杜十娘は、李公子の人柄を見て夫婦を誓いあい、自分の金を李公子に与えて身受けをさせた。二人は結婚の許しを得るべく李公子の父の住む紹興府に向かった。たまたま瓜州で風雪のため停舶しているときに、新安の商人の息子孫富賚が杜十娘の美貌に惹か

れ、李公子を口説いた。妓女のために金を失って、かつその女を伴って帰ることで予想される父の怒りへの恐怖が、次第に高まっていた李公子は、いとも容易に孫富賚の要求に応じて、千両で売り渡すことに同意した。このことを知った杜十娘は、携えてきた数千万両の金銀財宝を江中に投げ終わると、李公子の負心を罵って暗い冬の江中に身を投じた。この財宝は李公子との生活に役立てようと持って来た蓄えであった。[21]

まず作品の冒頭箇所を検討したい。そして原文に続いて現在定訳とされる千田九一の東洋文庫訳（以下「千田訳」）を掲げた上で、今東光の訳を紹介する。なお行論の都合上、鈴木眞海訳（以下「眞海訳」）については、脚注[22]で引用することとした。

「(1) 話中單表萬歷二十年間、日本國關白作亂、侵犯朝鮮。朝鮮國王上表告急、天朝發兵、泛海往救。有戶部官奏准『(2) 目今兵興之際、糧餉未充、暫開納粟入監之例。』原來納粟入監的、有幾般便宜。好讀書、好科舉、好中、(3) 結末來又有個小小前程結果。以此宦家公子、富室子弟、到不愿做秀才、(4) 都去援例做太學生。自開了這例、兩京太學生、各添至千人之外。內中有一人、姓李名甲、字干先、浙江紹興府人氏。(5) 父親李布政所生三兒、惟甲居長。自幼讀書在庠、未得登科、援例入於北雍。因在京坐監、與同鄉柳遇春監生同游教坊司院內、與一個名姬相遇。那名姬姓杜名媺、排行第十、院中都稱爲杜十娘。」

（(1) さて、話は万暦二十年、日本国の関白が乱を起こして、朝鮮を侵犯してきたときのことである。朝鮮の国王が上表して危急を訴えたので、天朝では兵を発して海路よりこれが救援に赴くことになったが、このとき、戸部（財政部）の当局は、「(2) 戦争勃発に際し、糧秣の不足を補うため、暫く納粟入監（穀物または銀を上納して国子監の監生の資格をとる）の制度を設けられたし」と上奏して裁可を得た。そもそもこの納粟入監という制度には、いろいろの便宜があって、勉強するにも、科挙の試験を受けるにも、交際をするにも、すべて好都合な上に、(3) 将来はまたなにがしかの官途も約束されているわけである。そのために、役人や金持の子弟は、秀才（府県学の学生）にはなろうとしないで、(4) みんなこの制度を利用して太学生（国学の学生、監生）になった。この条例が出てからというものは、両京（北京と南京）の太学生はどちらも千人以上にふえてしまった。

その中に、姓は李、名は甲、字を干先といって、浙江は紹興府の人がいた。(5) 父親の李布政（省の政務官）には三人の子があり、甲はその長男で、小さいときから郷里の学校で勉強をしたが、まだ上の試験が受からなかったので、この制度にすがって北雍（北京の国子監）にはいった。そこで、都に出て学校生活をはじめたが、同郷の柳遇春という監生といっしょにあるとき色街に遊び、一人の名妓に出くわした。その名妓は、姓は杜、名を媺といって、姉妹順が十番目に当たるので、廓では皆から杜十娘と呼ばれていた）[23]

この箇所を今東光はこのように翻訳している。

（1）話は萬歷二十年のことです。日本國の關白が亂を起して朝鮮に打入りましたので、朝鮮國王は表を奉つて、急を天朝に告げました。天朝に於かれては、兵を發して、海を越えてこれを救はれましたが、時の戶部官が奏聞いたしますのに、

『（2）目下のところ、兵を擧げてゐる際でありまして、糧食も充分で御座いませぬ。當分の間、納粟入監の例を開いては如何で御座いませう。』

元來、この錢穀を納めて國子監の太學生となることが出來る納粟入監といふことには、種種な便宜があります。

例へば讀書に都合がよく、科擧の試驗にも都合がよく、交友の便もあり、（3）それに將來何等かの立身の望もあります。だから、自然、貴族や富豪の子弟は、試驗に應じて秀才になるのを好まないで、（4）誰もが見習つて太學生になりました。これが例となつて、南北兩京の太學生は、各〻千人を越える有樣でした。

この太學生の中に、姓を李、名を甲、字を十（ママ）先といふ者がありました。浙江は紹興府の人で、（5）父は李布政といひ、三人兄弟中の長男でありました。幼い時から書物に親み、學校にも入りましたが、まだ科擧の試驗には合格しません。規定によつて國子監に入り、北京に居たものですから、同鄉の柳遇春といふ監の學生とつれだつて、紅燈の巷に遊ぶやうになり、此の里で一人の名妓に逢つたのです。その妓（をんな）は杜嫩といつて、十番娘なので、廓では誰いふとなく杜十娘と呼ばれて居ました。[24]

概ね原文に対して忠実に翻訳が行われているが、訳文を精読すると、今東光の語学能力や当時の白話語彙の研究水準の面から注目すべき箇所が見られる。

問われる文言と歴史的知識　今東光による「白娘子」の翻訳を眺めると、随所で目にするのが、彼が難解な白話語彙と格闘した足跡である。以下今東光訳の翻訳状況を分析する。（なお以下に引用する眞海訳の訳文の下線部にある波線部は原文にない加筆箇所を指し、点線部は原文（原義）と異なる箇所を示している。）

まず傍線部（1）「話中單表萬歷二十年間、日本國關白作亂、侵犯朝鮮。朝鮮國王上表告急、天朝發兵泛海往救」であるが、ここは正文（作品の本筋）の冒頭部にある語りの部分である。そのためやや畏まった口調であり、白話というよりも文言に近い表現が多いが、その中に白話独特の語彙も混在するという難解な箇所である。

文頭の「話中單表（huà zhōng dān biǎo）」は、「話中只説（huà zhōng zhǐ shuō）」「話中且説（huà zhōng qiě shuō）」などと同じく白話小説の冒頭で使われる常套句であり、さてお話は、とほぼ同義である。「上表（shàng biǎo）」は天子に上奏文を提出するという動詞、「告急（gào jí）」は軍事や災害などの場合に救援を請うことを意味する動詞である。「天朝（tiān cháo）」は外国に対して用いられたもので「我が王朝」を意味する呼称。「泛海（fàn hǎi）」は、直訳すると海に浮かぶという意味であるが、白話語彙では海路を行くことを意味する。「往救（wǎng jiù）」は助け

に行く、救援に行くという動詞である。以上の語釈を踏まえると、ここでの意味は、「さてお話は万暦20年のことでございます。日本国の関白が乱を起こし朝鮮へ来襲しました。朝鮮の国王は上奏して危急を訴えたので、我が朝廷は兵を出し、海から救援に駆けつけました」となる。この箇所を眞海訳は「話は萬歷二十年間のことである。日本の關白が亂を作して朝鮮へ來襲した際、朝鮮王から表を上つて危急の訴があつたので、天朝は兵を發し海を渡つて朝鮮救援の大役を起された」としている。「上表」を「表を上つて」とあるほか、「往救」を「朝鮮救援の大役を起された」としているなど、眞海訳には原文理解が困難であった思われる箇所や、それを補うために説明的な加筆が見られる。この箇所を今東光訳は「話は萬歷二十年のことです。日本國の關白が亂を起して朝鮮に打入りましたので、朝鮮國王は表を奉つて、急を天朝に告げました。天朝に於かれては、兵を發して、海を越えてこれを救はれました」としており、眞海訳での不備や原文にない加筆箇所は、今東光訳ではより的確な表現で記されていることがわかる。ここからも解るように、今東光では民間翻訳でよく見られた説明的な加筆がほぼ見られない。恐らくは明確な翻訳姿勢として原文にない加筆を極力避けたものと思われる。今東光訳には幾つかの特色が見られるが、翻訳時における加筆の排除がもっとも大きな特徴と言うことができよう。

文言に混在する白話語彙の対応　傍線部（2)「目今兵興之際、糧餉未充、暫開納粟入監之例」であるが、ここは戸部官による奏准（上奏して許可を受ける）の箇所であるため、白話小説であるにも係わらず文言が多用され、書面語を理解していないと読解が覚束ない箇所である。「目今（mù jīn)」は目下、現在という書面語、「糧餉（liáng xiǎng)」は将校や兵士に支給する食料と金銭を意味するため、糧秣や軍備、軍糧と翻訳できる。「暫（zàn)」は短期間を示し、日本語だと、しばらく、一時の意味。次の「開（kāi)」は、様々な意味があるが、ここでは「～を始める」の意味と思われる。そして「納粟入監（nà sù rù jiān)」は、国子監（国の教育機関）に入るために穀物や銀を収める事を指し、粟、米や銀などを国庫に納入し、国子監に入る資格を得る制度を意味する。本作品の原文註釋を担当した宮原民平は、この語句に「政府に錢穀を納めて國子監の監生たる資格を得ること。即ち試驗を經ずして大學生たり得ること」という頭註[25]を加えている。つまり傍線部の意味は、（戸部官は）現在は兵を起こすに際して、軍糧が充分ではないので、ここは一時的に納粟入監の例を開始するように（上奏して裁可を得た）となる。この箇所を眞海訳は「かく大軍を動かさるゝに就いては軍需糧食等が甚だ充分でなく、國家として非常に苦しむところであるから、これに對する應急策として『納粟入監』即ち穀物食糧品軍用金等を獻納した者に、その子弟の大學入學を許可するといふ特例を開いて、廣く全國の富豪から戰費勸募を決行しやうといふ上奏があつたので、直ちに御裁可の上實施されることゝなつた。」とあるように、文脈説明のために付与された加筆が多いほか、点線部分の通り「奏准（上奏して許可を請う)」を「上奏があつた」としており、原文の理解がやや異なっていることが判る。

この箇所を今東光訳は「目下のところ、兵を擧げてゐる際でありまして、糧食も充分で御座いませぬ。當分の間、納粟入監の例を開いては如何で御座いませう」としており、原文にある「開」の解釈にやや的確さが欠ける面が見えるほか、眞海訳と同じく「奏准」を「如何で御座いませう」

と意訳していることがわかる。この箇所は官府制度に関する用語が多く、通俗文学というよりも明代史の知識が必要である。そのため中国語学が専門である宮原も手に負いかねたのであろうか彼の註釋も存在しない。

次の傍線部（3)「結末來又有個小小前程結果」は、難解な語句はないものの解釈で難儀する。「結末（jié mò)」は、結末や決着を意味する所から、転じて「最後には～」の意味であり、宮原による原文註釋に「將來若干立身の望あり」と頭註[26]がある。「前程（qián chéng)」は、前途や未来のほか、白話語彙では（役人や知識人が望んだ）功名や官職を意味する。ここでの意味は（納粟入監は様々な面で条件が良いため）最後にはちょっとした役職にありつくことが出来るという意味となる。

この箇所を眞海訳は「且つ將來の昇進榮達にも非常に割が好かつたので」としており、よく練られた解釈と言える。「且つ」は「又（yòu)」から解釈した可能性もあるが、眞海による加筆の可能性も考えられる。そのほか「小小」を「非常に」と訳している点も留意すべきであろう。この箇所を今東光訳は「それに將來何等かの立身の望もあります」としている。これは宮原の註釋のサポートにより白話独特のニュアンスがより正確に反映されている。両者とも高いレベルでの翻訳であるが、今東光訳の方がより原文の意味に近い。

傍線部（4)「都去援例做太學生」であるが、「援例（yuán lì)」は、前例によって～するという動詞であり、宮原による原文註釋には「規程によりて國子監に入る」の頭註[27]がある。「太學（tài xué)」は、古代国都に置かれた最高学府であり、宋代までは八品以下の官吏と民間の優秀な子弟が入学した。なお本作品が成立した時期（明代）では太學は廃止されている。そのためここは「太學生」と読み、国子監の学生を意味する。この箇所を眞海訳は「爭つて『納粟入監』で大學へ入學を志望した」としており「都（みな)」の解釈を無視しているほか「援例」も「爭つて」と訳している。一方の今東光訳は「誰もが見習つて太學生になりました」と眞海訳の不備が解消しているのがわかる。

そして傍線部（5)「父親李布政所生三兒、惟甲居長。自幼讀書在庠、未得登科、援例入於北雍」であるが、ここは官職名や歴史上の施設に関する呼称についての知識が必要な箇所である。「布政（bù zhèng)」は、財政・租税・税関を管理する布政使の職名。ここでの「居（jū)」は位置する、「長（zhǎng)」は排行つまり、兄弟の長幼の順序が一番であること。「庠（xiáng)」は一般的な学校の意味や、狭義では郷村に設けられた学校を示す。「登科（dēng kē)」は科挙の試験に合格する、つまり進士及第の意味、「北雍（běi yōng)」は国子監の建物の一つで辟雍（bì yōng）の略であり、南京の「南雍」に対して北京に設置されたものを示す。つまりここでの意味は、父親である李布政は三人の子供がいたが、ただ甲が長男にあたるので、幼い頃から学校で学んでいたが、未だに科挙及第には至らなかったので、（納粟入監にならって）北雍（北京の国子監）に入学したとなる。

この箇所を眞海訳は「父は鄉里の行政官で、甲は三人兄弟の一番上の兄に生れ、幼少から學校へ入れて勉强させられ、まだ秀才の試驗に及第しないうちに納粟入監が特許されたのを幸い北京

の大學へ入學し、都の大學生生活に入つたのである。」とあり、細かな加筆のほか翻訳にも幾つか不備が見える。例えば「秀才の試驗に及第しないうちに」とあるが、秀才は「院試」合格者（生員）を意味する。しかし、原文の「未得登科」は、まだ進士に合格していないことを意味するので、原文と訳文で意味が矛盾している。この箇所を今東光は「父は李布政といひ、三人兄弟中の長男でありました。幼い時から書物に親み、學校にも入りましたが、まだ科舉の試驗には合格しません」としている。眞海訳よりは正確であるが、「未得登科」はやや曖昧である。

次に作品の後半部分を検討したい。ここでは杜十娘を家に招くことで親の逆鱗に触れ、周囲の人々から阻害されることを恐れた李公子を杜十娘が介抱する場面を引用したい。

（6）卻說杜十娘在舟中、擺設酒果、欲與公子小酌、竟日未回、挑燈以待。公子下船、十娘起迎。見公子顏色匆匆、似有不樂之意、乃滿斟熱酒勸之。公子搖首不飲、一言不發、竟自床上睡了。十娘心中不悅、（7）乃收拾杯盤爲公子解衣就枕、問道『今日有何見聞、而懷抱鬱鬱如此。』公子嘆息而已、終不啓口。問了三四次、公子已睡去了。（8）十娘委決不下、坐于床頭而不能寐。到夜半、公子醒來、又歎一口氣。十娘道『郎君有何難言之事、頻頻嘆息。』（9）公子擁被而起、欲言不語者幾次、撲簌簌掉下淚來。十娘抱持公子于懷間、軟言撫慰道『妾與郎君情好、已及二載、千辛萬苦、歷盡艱難、得有今日。（10）然相從數千里、未曾哀戚。今將渡江、方圖百年歡笑、如何反起悲傷。必有其故。夫婦之間、死生相共、有事盡可商量、萬勿諱也。』

（（6）さて、こちらは舟に残った杜十娘、酒さかなの用意をととのえ、公子とふたりで一杯やろうと思っていたところ、一日じゅう帰りがないので、燈（あかり）をつけて待っていた。やがて戻って来た公子を、いそいそ立って迎えてみれば、何だかそわそわして、おもしろくない事でもありそうな様子。そこで熱燗（あつかん）のところを盃になみなみついですすめてみたが、公子はかぶりを振ってひとくちも飲まず、一言もいわず、そのままひとりで床にはいってしまった。

十娘も何だかつまらなくて、（7）酒の道具を片づけると、公子の着物をぬがせ、枕をあてがってやりながら、

「今日はまた、何をそんなにふさぎこんでいらっしゃるの」

とたずねてみたが、公子は溜息をつくばかりで、ちっとも口を開かない。何度もたずねているうちに、公子はいつしか眠り込んでしまった。（8）十娘は何が何だか訳がわからず、枕もとに坐ったまま、寝ようにも寝られなかった。

夜中になって、公子は眼をさますと、またホッと溜息をついている。

「あなた、どんな言いにくいことがあって、そう溜息ばかりついていらっしゃるの」

（9）公子は蒲団を抱いて起き上がり、何度かいおうとしながらどうにも切り出せず、涙をポロポロ流しはじめた。

十娘は公子を胸に抱きしめながら、やさしい慰めの言葉をかけた。

「あたしとあなたは深い仲になってからもう二年、ずいぶんいろいろと苦労をした挙句、やっと今日まで漕ぎつけたんですわ。(10) でも、はるばる何千里という道中のお供をしながら、ついぞうら淋しい思いをしたことはありません。これから河を渡って、永い将来の楽しい生活のことを考えようというのに、どうしてそんなに悲しんでいらっしゃるの。きっと訳がおありでしょう。夫婦となれば、死ぬも生きるももろともです。何か事情があれば思いきり相談なさること、ちっとも遠慮はいりませんわ」）[28]

この箇所を今東光はこのように翻訳している。

(6) 杜十娘の方では、舟に居て、酒肴の用意を備へ、公子と一緒に一杯やるつもりであつたのに、終日歸つて來ないので、燈をかかげて待つてゐました。そこへ歸つて來たので、起つて迎へました。ところが、公子の顔色が悪く、浮かない様子が見えたので、熱燗を波波と注いで勸めました。公子はただ首を振つて飲みもせず、また一言も發しません。終には寢床にもぐり込んで寐て仕舞ひました。十娘は面白くありません。(7) 杯盤を片づけて、公子の着物をぬがせてやり、自分も枕につきました。

『今日、何かあつたのですの。ずゐぶん鬱いでいらつしやいますのね。』

公子はただ歎息するだけで、ちつとも口を利きません。三四度問うてゐるうちに、いつか睡つて仕舞ひました。(8) 十娘ははらはらして、枕もとに坐つたまま、寢ることも出來ませんでした。

夜中になつて、公子は眼を醒まし、また溜息を一つ吐きました。十娘は訊きます。

『ねえ、あなた、何か言ひ難(にく)い事件がお有りになるの、溜息ばかりついて。』

(9) 公子は蒲團を抱いて起きあがり、幾度となく、話しかけようとしては、また口籠り、さめざめと涙を流してをります。十娘は公子を胸にひしと抱きしめて、口柔かに慰めながら、

『あなたとあたしの仲も、もう二年になります。世の中の苦勞といふ苦勞は嘗めつくして、やつとのこと、今のやうな境遇になり、(10) 千里の道も、一度だつて哀しいの淋しいのと思つたこともありませんわ。それに今日にでも此の江を渡つて仕舞へば、末永く樂しい計畫出來るんですもの。それにまた、何だつて悲しさうになさるの。これにはきつと譯があるんでせう。夫婦の間ですもの、生きるも死ぬるも諸共ぢやありませんか。いざ事があれば相談して下さいな。水臭いぢやないの。』[29]

文言調の会話に混在する白話と呉語　まず傍線部 (6)「卻說杜十娘在舟中、擺設酒果、欲與公子小酌、竟日未回、挑燈以待。公子下船、十娘起迎」であるが、ここは文言の中に白話語彙や呉語（呉方言）が混在する箇所である。「擺設（bǎi shè）」は美術品などを陳列するという意味であるが、白話語彙では「並べたご馳走」を意味する。「酒果（jiǔ guǒ）」は酒と果物（乾燥させた果物や落花生を示す）であり、「小酌（xiǎo zhuó）」は（正式ではない招宴で）ちょっと一杯や

るという呉方言、「竟日（jìng rì）」は終日、一日中という書面語である。そのため、さて、杜十娘は船の中で、酒と果物を準備し（李）公子と一杯やろうと思っていたが、一日中（彼は）戻ってこなかったので、（杜十娘は）灯りを付けて待っていた。公子は船に戻ってきたので、十娘は起きて彼を迎えたとなろう。

この箇所を眞海訳[30]は「杜十娘は、船の中で酒の用意をし肴なども陳べて、公子が歸つたら嬉しい淺酌をしやうと待つてゐた。然るに日暮までも歸つて來ない。もう歸りさうなものだと、燈を點けて待つてゐるとそこへ公子はぼんやり船へ下りて來た。十娘はいそいそ出迎へたが」とある。「擺設酒果」「小酌」は的確に理解しているものの「竟日」まではどうも理解が及んでいないように思える。この箇所を今東光訳は「杜十娘の方では、舟に居て、酒肴の用意を備へ、公子と一緒に一杯やるつもりであつたのに、終日歸つて來ないので、燈をかかげて待つてゐました。そこへ歸つて來たので、起つて迎へました」と、眞海訳の不備の箇所は、いずれも的確に翻訳していることが理解出来る。

傍線部（7）「乃收拾杯盤爲公子解衣就枕」であるが、「收拾（shōu shí）」は①準備する、用意する、②片付けるがあるが、ここでは（前文で杜十娘が酒肴を既に準備しているので）片付けるである。「杯盤（bēi pán）」は酒杯や皿のほか、酒肴も意味する。「就枕（jiù zhěn）」は就寝するという意味の書面語である。となるとここでの意味は、（杜十娘は）酒肴を片付けて公子のために衣服を脱がせ、寝かせてあげたとなるが、この箇所を眞海訳は「盃盤を取り纏め、床へ入つて」とあり、加筆が多い眞海訳にしては淡泊であり原文の「爲公子解衣就枕」が殆ど訳されていない。一方の今東光訳は「杯盤を片づけて、公子の着物をぬがせてやり、自分も枕につきました」としており、今東光は「爲公子（公子のために）」したことを「解衣」だけと判断し、「就枕」の動作の主語は杜十娘ではないかとしている。確かに今東光の解釈も可能性も否定しないが、ここは甲斐甲斐しく公子の世話をする杜十娘を強調している場面であるから、千田訳の通り「酒の道具を片づけると、公子のきものをぬがせ、枕をあてがってやりながら」とする方が妥当であろう。

文言に潜む白話の難解語　傍線部（8）「十娘委決不下、坐于床頭而不能寐」であるが、ここは白話独特の接尾語をいかに理解するかが課題となる。「委決（wěi jué）」は決定する、決断するという動詞、「～不下（bú xià）」は、白話語彙で「～することができない」という接尾語である。この箇所は難解であり宮原も原文註釋で「心中どうして可いかわからぬこと」と頭註[31]を付けている。「床頭（chuáng tóu）」は、枕元（ベッドの頭の部分）、「寐（mèi）」は寝る、眠るである。つまりここでの意味は、（徒）十娘は何も切り出すことができず、枕元に座り寝ることもできなかったとなる。この箇所を眞海訳は「十娘には甚だ意味が判らない。睡れなくなつて床の端へ坐つて居た」としており「委決不下」を大幅に意訳している。ここは今東光訳も「十娘ははらはらして、枕もとに坐つたまま、寢ることも出來ませんでした」とあり、眞海訳よりも的確であるが「委決」の解釈はやや意訳している。註釋者の宮原は「心中どうして可いかわからぬこと」と注記があるので、千田訳でも「十娘は何が何だか訳がわからず、枕もとに坐ったまま、寝ようにも寝られなかった」と翻訳の完成度は高いものの、やや意訳に過ぎる印象がある。

傍線部（9)「公子擁被而起、欲言不語者幾次、撲簌簌掉下涙來」であるが、「擁被（yōng bèi)」は掛け布団にくるまる、「撲簌簌（pū sù sù)」は（涙などが）ぽろぽろ流れ落ちる畳語。そして「掉下（diào xià)」は落ちる、落とす動作を意味する。そのためここの文意は、公子掛け布団にくるまったまま起きあがったが、幾度となく、何か言いたそうにしていたが何も言わず、はらはらと涙を流したとなるが、この箇所を眞海訳は「公子はむつくり掛蒲團を抱えたまゝ半身起き上つたが、やはり何か言はうとして言ひ出せずに澁つて居るらしい。そしてむらむら悲しみが湧き返るやう涙をほろほろと澪してゐる」としており、加筆が見られるものの概ね正確に翻訳しているが、「擁被」は原義と異なる。これは今東光訳も同一で「公子は蒲團を抱いて起きあがり、幾度となく、話しかけようとしては、また口籠り、さめざめと涙を流してをります」としており、正確には翻訳されていない。これは千田訳でも同一であり、当時の語学水準では翻訳が困難であった事例であろう。

そして傍線部（10)「然相從數千里、未曾哀戚。今將渡江、方圖百年歡笑、如何反起悲傷」であるが、ここは発言箇所であるにもかかわらず文言による表現が用いられている。「未曾（wèi céng)」は「かつて～した経験がない」であり、「哀戚（āi qī)」は「哀凄（āi qī)」と同じく、悲しむという動詞であるが、白話語彙では悲しみ、哀れみという名詞的用法がある。「將（jiāng)」は副詞で、動作あるいは状況がまもなく起ころうとしていることを示す副詞。「方（fāng)」は「正在」「正当」と同じく、まさに～しているの意味。「圖（tú)」は（手に入れようと）求める、計画するの意味であろう。ここでの意味は、それでも二人は数千里もお供し、これまで悲哀を感じたことはありません。今将(まさ)に川を渡ろうとしており、まさに末永い喜びが（これから）あるとしているのに、どうして反って悲しそうなの、となろう。

この箇所を眞海訳は「散々苦勞をし拔いて、やうやく此うした晴れた身になり、二人一所に遙々とまだ會はぬお父さんお母さんのお目に掛らうと樂しんで、もういよいよこの大河を越へればお國の地方へ着くといふ、一生一度の喜びなのに、どうなすつたんですよ」とあり、大幅な加筆が見られるほか「未曾哀戚」を「散々苦勞をし拔いて」と「如何反起悲傷」を「どうなすつたんですよ」としており、誤訳や意訳がまま見られる。この箇所を今東光訳は「千里の道も、一度だつて哀しいの淋しいのと思つたこともありませんわ。それに今日にでも此の江を渡つて仕舞へば、末永く樂しい計畫出來るんですもの。それにまた、何だつて悲しさうになさるの」としており、極めて高い水準で翻訳を行っていることがわかる。

以上、検討した傍線箇所の今東光訳の傾向を内容毎に類別すると、

（1）当時の研究水準では翻訳が困難な事例（2・4・5・7・8・9）
（2）先行翻訳に比べて正確な翻訳を行った箇所（1・2・3・4・5・6・7・10）
（3）先行翻訳に比べて不正確な翻訳を行った箇所（該当なし）

となる。本作品で多いのが、当時の研究水準では翻訳が困難な事例である。これからも「杜十娘」

は難解な箇所が多いことが理解でき、それゆえに江戸時代の翻案作品も登場しなかったのは、この理由によるものではないかとも思われる。

その上で、分析結果から明らかに言える点として今東光訳の際だった正確さがあろう。論者はこれまで多くの翻訳分析を行ってきたが、これほど翻訳水準に差が見られた事例は極めて少ない。これは比較対象となった眞海訳に大きな問題があるという判断も考えられるが、今回の分析作業の範囲で言えば、眞海訳に大きな問題があったというよりも、寧ろ今東光訳が極めて高い精度の翻訳であったと判断すべきである。

それでは、なぜ今東光訳はこれほどまでに高い翻訳水準を示したのであろうか。それが問題となろう。

三　今東光訳の翻訳水準はなぜ高かったのか

今東光訳の分析を行ったが、ほぼ同時期に刊行された鈴木眞海訳と比較しても、その翻訳水準は極めて高いことが判明した。

なかでも今東光訳の優れる特徴として、白話語彙に関する的確な翻訳であることは間違いない。上述の通り、傍線部（3）の「結末（jié mò）」、傍線部（6）の「擺設（bǎi shè）」、傍線部（8）の「委決不下（wěi jué bú xià）」、そして傍線部（10）の「哀戚（āi qī）」の箇所で述べたとおり、眞海訳と今東光訳での翻訳水準の差は、白話語彙の理解の差であることが多い。就中その過半は宮原民平による註釋が有効なアシストとなっていたことが明らかになった。

鈴木眞海の詳細な為人（ひととなり）は明らかではない。だが『鴛鴦譜　外三種』巻頭にある桔梗山房主人の小引『今古奇觀』の紹介内容より推察によるに、真海は在野の支那愛好者と思われるが、『剪燈新話』や『本草綱目』の翻訳[32]のほか、すべて駢儷（べんれい）文で綴られている才子佳人小説『燕山外史』の翻訳[33]すら刊行している点から見ても、彼の学識の高さは相当なものであることは充分理解出来る。

ただ、これらの翻訳はすべて文言であり白話小説ではなかった。眞海自身も巻頭に掲げた凡例の中で、今古奇觀について「口語、俗語を綴つてあるので、直譯を試みることは全然不可能といつてよい。隨つて返り點は甚だ無理なものである。これは誦讀の便にはならぬもので纔に文意を斟む上の補になるに過ぎない」[34]と述べているとおり、白話小説は文言の訓読による翻訳では充分対応出来ないことを認識していたのである。

それでは、一方の今東光の学識はどうであろうか。支那文學大觀で『桃花扇』の全訳を担当した事実からも相当の学識があったと思われる。しかし彼の白話小説に関する知識は独学であり、彼の学識を測る尺度となるべき学歴もない。そのため、彼の専門知識を客観的に実証するのは困難である。

その一方、客観的な事実として指摘できるのが、今東光が翻訳した『今古奇觀』について、原文語釈として大学研究者側から参画した人物が、宮原民平であったという点である。

宮原民平は当時拓殖（東洋協会）大学教授であり、中国語学・中国文学の専門であった。彼は

中国語の工具書や中国語教材[35]のほか、『國譯漢文大成』では『西廂記』『還魂記』『漢宮秋』『燕子箋』の翻訳[36]を、また『古典劇大系』で『竇娥寃』『老生兒』『倩女離魂』『琵琶記』等の戯曲の翻訳[37]を担当している通り、中国の戯曲小説に関する知識は当時屈指の存在であった。

彼の研究姿勢は、徹底した現地主義であり、それは彼の経歴に大きな影響があるものと思われる。彼は1902年に台湾協会専門学校（現拓殖大学）に入学するが、在学のまま陸軍省より学生通訳官を命ぜられ、日露戦争に出征している。その後も母校派遣命令で辛亥革命時期の中国に留学している。

そして宮原は、現実の中国社会に触れる中で、漢学としてとらえた中国像と現実の中国像が大きく乖離していることを痛感していたのである。その彼が中国を理解する方法が興味深い。

宮原は「支那を知りたければ、支那を組織してゐる支那人を知らなければならない。では、どうすれば、もっともよく支那人を知り得るか。その最も適切なる方法は、我身みづから支那人に爲ってみることである。支那人と共に生活することである」と述べ、中国の本質を知る手段として重要であるのが「彼等の日常生活の底の底まで覘いてみること」[38]であると指摘する。つまり中国の理解には中国人や中国社会を直接的な関わりを持つことで、中国に関する様々な知識を体得する必要性を宮原は強調しているのである。

しかしこの傾向は、単なる宮原の個人的な見解にとどまらない。

実際、白話語彙の研究が行われた東亜同文書院大学[39]の所在地は上海であった[40]ほか、長年白話語彙研究[41]に携わっていた萩尾長一郎も北京留学の経験を持つほか、満州国新京（長春）にあった建國大学[42]の教員をはじめ長く日本国外で勤務した経験を持つ[43]。

そしてその傾向は白話小説の翻訳でも軌を一にした傾向が見られる。「三言」所収篇の翻訳事例では、白話小説翻訳に必要な工具書が整備されていなかった時代、翻訳を発表した星野蘇山や井上紅梅の事例[44]、近藤總草の事例[45]があるが、これら翻訳活動は日本国内ではなく上海や蘇州、大連や奉天で行われていたのである。

その上で『今古奇觀』の註釋者である宮原は、白話小説をどのように認識していたのであろうか。彼の指摘では「小説戯曲が、最も正直にその国民の状態を示す。国民性でも風俗でも習慣でも、小説戯曲によって、最も詐らざるものがわかる。支那の小説を読めば支那の社会と人と思想とがわかる。そして多く読む程深くわかる」[46]とあり、中国の理解には白話小説が極めて重要なものであると述べている。

「杜十娘」翻訳担当の今東光は翻訳当時28歳[47]である。彼に中国渡航体験はない。そのため、中国や白話小説の理解に体験に根ざした一家言を持つ宮原民平の指導を仰ぎ、彼による原文註釋をたよりに口語訳化を試みたと推論して大過なかろう。このように考えると『今古奇觀』の翻訳に際しては、宮原民平の存在が大きな役割を果たしていると判断しても大過ないように思えるのである。

おわりに

本論の内容を要約すると、以下の通りである。

Ⅰ　小論では、今東光による翻訳「珠を擲つ（杜十娘）」(1926）に注目し、今東光が取り組んだ翻訳の一端を考察し、先行研究の欠落を補完することを目的とした。

Ⅱ　今東光の翻訳は、文学叢書『支那文學大觀』による『今古奇觀』翻訳企画の一環であったが、本叢書は「芸術と学術の統合」を標榜し、翻訳は当時の（中国文学に詳しい）小説家が、原文註釋には大学研究者が担当するという独自の構想を打ち出した。

Ⅲ「珠を擲つ（杜十娘）」の原作「杜十娘怒沉百寶箱」は、江戸時代に長崎へ舶来した記録が確認できる。訓読翻訳は明治時代に登場したが、その水準が低く、今東光訳の直前に発表された鈴木眞海訳があるにすぎなかった。

Ⅳ　今東光の翻訳状況であるが、同時期の鈴木眞海訳に比べて極めて的確な翻訳が行われている。文言に精通していた眞海も白話語彙の解釈には手間取り、原文にない加筆を施すことで文意を説明しようと苦心した一方、今東光訳は白話語彙を正確に理解しており、原文に即した的確な逐語訳が行われていた。

Ⅴ　眞海訳と今東光訳の比較の中で、翻訳の正確さを分けたのは、白話語彙をいかに正確に把握しているか否かにあった。鈴木眞海は数多くの文言翻訳の経験があるものの、白話小説は極めて少なく、眞海本人も白話小説の翻訳に自身の訓読翻訳の知識では対応出来ないと述べていた。その一方、今東光訳の『今古奇觀』註釋を担当した拓殖大学教授・宮原民平は、豊富な中国現地体験を持ち、当時の大学研究者の中でも卓越した白話の理解能力があった。そして宮原の原文語釈が今東光訳にも反映されており、「杜十娘」の翻訳水準の向上に繋がったものと判断できる。

注

1　井上紅梅訳『今古奇觀』(清水書店、1942）参照。井上紅梅による『今古奇觀』の翻訳については「井上紅梅の研究――彼の生涯と受容史から見たその業績を中心として」(勝山稔編『東アジア海域叢書　小説・芸能から見た海域交流』(汲古書院、2010）参照。

2　魚返善雄訳『中国千一夜　今古奇觀現代語訳（風雅の巻)』(日本出版協同、1952年11月)、同氏『中国千一夜（香艶の巻)』(日本出版協同、1953年2月)、同氏『中国千一夜（智謀の巻)』(日本出版協同、1953年11月）参照。魚返善雄による『今古奇觀』の翻訳については、拙稿「近代日本に於ける中国白話小説「三言」所収篇の受容について――村松暎・魚返善雄の翻訳と翻訳層の交代について」(『国際文化研究科論集』17号、2009）参照。

3　青年時代の今東光の画像は、大阪府八尾市立今東光記念館から提供を受けたものを引用した。

4　木下杢太郎（1885～1945）は詩人、劇作家、小説家、医学者。1911年東京大学医学部卒業。与謝野鉄幹の新詩社に入り、その後北原白秋と「パンの會」を結成（1908)、1909年の小説『荒布橋』、戯曲『南蛮寺門前』などで南蛮文学の領域を広げ、白秋と並ぶ耽美派の代表作家となった。大学卒業後は劇作家や小説集『唐草表紙』を発表、印象派の巨匠と目され、医学ではハンセン病・梅毒ことに糸状菌の研究に貢献した。木下杢太郎については、石川巧「木下杢太郎の「支那」通信と「支那学」の成立」(『九大日文』２号、2003)、古川裕之「若き木

下杢太郎の思想研究」(『哲学と教育』43号、1995)、伊藤整「パンの会と木下杢太郎」(『群像』19巻12号、1964）参照。野田宇太郎「木下杢太郎とキリシタン文学」(『国文学：解釈と鑑賞』32巻７号、1967）参照。

5　田中貢太郎（1880～1941）は小説家、随筆家。高知県生まれ。漢学塾に通い、代用教員、新聞記者などの職業を経て、大町桂月や田山花袋に師事、作品は紀行文を含む随想と情話の系譜にたつ実録物、怪談・奇談など多岐に渡る。田中貢太郎については、高西成介「田中貢太郎と中国の怪談」(『アジア遊学』105号、2007)、小林保治「田中貢太郎の近代説話集」(『日本文学』22巻４号、1973）参照。

6　鈴木彦次郎（1898～1975）は大正昭和時代の小説家である。盛岡中学校、第一高等学校をへて東京帝国大学英文科、のち国文科に転じて1923年卒業。高校時代寮の同室だった川端康成、石浜金作、酒井眞人に今東光の5人で第6次『新思潮』を1921年創刊。1923年文藝春秋同人、1924年川端、横光利一らの『文藝時代』に参加。新感覚派の一人とされた。1944年盛岡に疎開し、岩手県立図書館長、県教育委員長をつとめる傍ら、農民小説、大衆小説、歴史小説を発表した。

7　川端康成・鈴木彦次郎・今東光訳『唐代小説（支那文學大觀第８巻)』(支那文學大觀刊行會、1926)

8　今東光訳『桃花扇（上・下)(支那文學大觀第５・６巻)』(支那文學大觀刊行會、1926)

9　鹽谷温（1878～1962）は、東京出身の中国文学者。儒者の家に生まれる。東京帝国大学卒業後ドイツと清国へ留学、帰国後東京帝大教授となる。専門は元曲と白話小説であり、中国には伝存していなかった明代の白話小説『古今小説』『警世通言』などを内閣文庫で辛島驍・長澤規矩也らとともに紹介したほか、戯曲『西廂記』『桃花扇』などの翻訳や著作多数。詳細は鹽谷温『天馬行空』(日本加除出版、1956)、北浦藤郎「先学を語る　塩谷温博士〔含 略歴・著述目録〕」(『東方學』72輯、1986)、藤井省三「塩谷温」(江上波夫他『東洋学の系譜（第２集)』大修館書店、1994）参照。

10　宮原民平（1884～1944）は、佐賀県出身の中国学者。拓殖大学教授。台湾協会学校（現：拓殖大学）入学後、陸軍省学生通訳官として日露戦争に従軍。帰国後拓殖大学及び東京帝国大学講師を歴任、1939年拓殖大学第６代学監就任。篠原英敏「雄渾のこころ　宮原民平先生小伝 - 上・下 -」(『海外事情』10-11、1983)、拓殖大学創立百年史編纂室編『宮原民平　拓大風支那学の開祖』(拓殖大学、2001）及び拙稿「白話小説翻訳史における宮原民平の存在について――『支那文学大観』の事例を中心に」(『アジア遊学』105号、2007）参照。

11　竹田復（1891～1986）は、山梨県生まれの中国文学者・中国語学者。東京教育大学名誉教授。1918年東京帝国大学文学部支那文学科卒、北京留学を経て、東京帝国大学文学部助教授、東京教育大学教授、東洋大学教授、日本大学教授、大東文化大学教授を歴任。著書に『支那語新辞典』(博文館、1941)、『新字体漢和新字典』(河野書店、1954）等。「学問の思い出　竹田復博士を囲んで」(『東方學』37輯、1969)、内山知也「名譽教授竹田復先生の思い出（先學を語る)」(『大東文化大学漢学会誌』(44号、2005）参照。

12　公田連太郎（1874～1963）は、島根県出雲市の漢文学者である。21歳で上京し、漢学者根本通明に師事し。在野の漢学者として数多くの漢文の注釈を刊行した。1962年朝日文化賞を受賞。訳注書は國民文庫刊行會編『國譯漢文大成　史記本紀（１・２)』(國民文庫刊行會、1922)、同『史記世家（１・２)』(同、1923)、同『管子（１・２・３)』(同、1924）ほか多数。

13　林房雄による「三言」所収篇の小説化は、辛島驍による原文翻訳提供を受けたものであるが、辛島の翻訳は活字化されていない。詳細は拙稿「近代日本に於ける『警世通言』巻28「白娘子永鎮雷峰塔」の受容について――辛島驍訳の発見を中心として」(『国際文化研究』27号、2021)、同「近代日本に於ける『警世通言』巻二八「白娘子永鎮雷峰塔」の受容について――辛島驍訳本の発見と林房雄による小説化を中心として」(『国際文化研究科論集』28号、2020)、同「近代日本に於ける中国白話小説集「三言」所収篇の受容について――神谷衡平と林房雄の訳業を中心として」(『国際文化研究科論集』17号、2009）参照。

14　魚返善雄（1910～1966）は、大分県出身の言語学者、中国文学研究者。東亜同文書院中退。1933年東亜学校教員、1937年日華学会理事、NHK 嘱託として北京語放送を担当、1939年より東京帝国大学、東京大学文学部講師。戦時中、東京高等師範学校教授。戦後、東洋大学、駒澤大学、東洋大学客員教授。岡田袈裟男「魚返善雄――あ

るいはシナ言語学との出会い」(『国文学 : 解釈と鑑賞』57巻１号、1992）参照。

15　林房雄（1903～1975）は大分県出身の小説家。東京帝国大学中退。学生運動家からプロレタリア作家となる。獄中転向後は民族主義的作品を発表。第二次大戦後は「息子の青春」などの小説、戦後民主主義に異を唱える評論などを発表。「青年」「西郷隆盛」「大東亜戦争肯定論」などの著がある。林房雄と中国については、李雁南「失われた幻想空間――林房雄の「中国」」(『中央大学政策文化総合研究所年報』23号、2020）参照。

16　右掲『警世通言』の画像は、『警世通言（第三巻)』(ゆまに書房、1985）177頁より引用。

17　大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』(關西大學東西學術研究所研究叢刊、1967）参照。

18　服部誠一の翻訳については、拙稿「近代日本に於ける中国白話小説『三言』所収篇の受容について――明治時代から大正時代までの翻訳事業を中心として」(『国際文化研究科論集』14号、2006）参照。

19　鈴木真海『鴛鴦譜　外三種』(支那文獻刊行會、1925)

20　「杜十娘」の考察については伊藤（上原）徳子氏の一連の著作に詳しい。伊藤徳子「『杜十娘』論」(『人間文化研究科年報』14号、1998)、上原徳子「白話小説「杜十娘怒沈百寶箱」の受容について　香港映画『Miss 杜十娘』を中心に」(『饕餮』16号、2008)、同氏「「杜十娘」考――連環画『杜十娘』の諸相」『宮崎大学教育文化学部紀要（人文科学)』28号、2013)、同氏「「杜十娘怒沈百寶箱」の翻案について―「杜十娘」から Miss Tu へ―」(『中国古典小説研究』20号、2017)、同氏「翻案作品分析からみた「杜十娘」」(『宮崎大学教育学部紀要（人文科学)』88号、2017）参照。

21　小川陽一『三言二拍本事論考集成』(新典社、1981）146～147頁参照。

22　該当箇所における鈴木眞海の訳文は以下の通りである。

(1）話は萬歴二十年間のことである。日本の關白が亂を作して朝鮮へ來襲した際、朝鮮王から表を上つて危急の訴があつたので、天朝は兵を發し海を渡つて朝鮮救援の大役を起された。その際民政部の當局から、(2）かく大軍を動かさるゝに就いては軍需糧食等が甚だ充分でなく、國家として非常に苦しむところであるから、これに對する應急策として『納粟入監』即ち穀物食糧品軍用金等を獻納した者に、その子弟の大學入學を許可するといふ特例を開いて、廣く全國の富豪から戰費勸募を決行しやうといふ上奏があつたので、直ちに御裁可の上實施されることゝなつた。

この『納粟入監』といふのは、いろいろな意味での特典と便宜がある。讀書研究にも都合が好く、試驗任官にも都合が好く、高貴權門との交際にも都合が好い。(3）且つ將來の昇進榮達にも非常に割が好かつたので、その頃の官吏の子や富豪の子は、地方推薦の秀才などになつてまごまごくしてゐるものはなく、(4）爭つて『納粟入監』で大學へ入學を志望した。この特例を開いてから兩京の大學は忽ち千名以上も在學者が增加したのであつた。

その納粟入監學生で、北京の大學に李甲といふ青年があつた。字は于先といつて浙江紹興府の出身である。(5）父は鄉里の行政官で、甲は三人兄弟の一番上の兄に生れ、幼少から學校へ入れて勉强させられ、まだ秀才の試驗に及第しないうちに納粟入監が特許されたのを幸い北京の大學へ入學し、都の大學生生活に入つたのである。官吏の子でも納粟入品の出來る位のものはみなかなり富裕の家の子ばかりで遊湯兒もなかには少くない。李甲も同鄉の學生柳遇春と屡々花柳の巷に脚を入れ、適北京花柳界でも有名な一美人と相知るやうになつた。その美人といふのは姓は杜、名は媺といつて、その廓の十軒目の家に抱へられてゐたところから、都下の風流子間には杜十娘で通つてゐた。兎に角非常な尤物であつた。

（鈴木眞海『鴛鴦譜　外三種』(支那文獻刊行會、1925）243～245頁参照）

23　千田九一訳（『今古奇觀１　明代短編小説選集』(平凡社、1965）116～117頁参照。

24　今東光訳『今古奇觀（支那文學大觀第11卷)』(支那文學大觀刊行會、1926）124～125頁参照。

25　宮原民平「杜十娘怒沈百寶箱」註 (頭註10)『今古奇觀（支那文學大觀第11卷)』63頁参照。

26　宮原民平「杜十娘怒沈百寶箱」註 (頭註11)『今古奇觀（支那文學大觀第11卷)』63頁参照。

27　宮原民平「杜十娘怒沈百寶箱」註 (頭註13)『今古奇觀（支那文學大觀第11卷)』63頁参照。

28　千田九一訳『今古奇觀１　明代短編小説選集』(平凡社、1965）139～140頁参照。

29　今東光訳『今古奇觀（支那文學大觀第11卷)』(支那文學大觀刊行會、1926）154～155頁参照。

30　該当箇所における鈴木眞海の訳文は以下の通りである。

(6）杜十娘は、船の中で酒の用意をし肴なども陳べて、公子が歸つたら嬉しい淺酌をしやうと待つてゐた。然るに日暮までも歸つて來ない。もう歸りさうなものだと、燈を點けて待つてゐるとそこへ公子はぼんやり船へ下りて來た。十娘はいそいそ出迎へたが、公子は何となく落ち付かぬやうに浮かぬ顔をして、どうやら不愉快氣に見へる。熱燗(あつかん)を一盃薦めたが、それも首を搖つて口を付けない。そして一言も口をきかずに、床へ入つて睡つて了つた。十娘も甚だ不滿だつたが（7）盃盤を取り纒め、床へ入つてから訊いて見た。

『今日何か嫌やなことでもあつたんですか。どうしてそんなに薈結(ふさ)いでいらつしやるの』

李公子はたゞ妙な吐息をして居るばかりで一向物を言はない。三四回同じやうに訊いたが、もう睡つて了つてゐた。(8）十娘には甚だ意味が判らない。睡れなくなつて床の端へ坐つて居た。夜半になると公子は目が覺めたらしく、『ア、ア』と力ない嘆聲(たんせい)を發して居る。

『あなた、どうなさいました。何か言ひ憎いことでもあるんですか、そんなに溜息ばかりして――』

(9）公子はむつくり掛蒲團を抱えたまゝ半身起き上つたが、やはり何か言はうとして言ひ出せずに澁つて居るらしい。そしてむらむら悲しみが湧き返るやう涙をほろほろと零してゐる。

十娘は靜かに公子を胸に抱き寄せて、優しい言葉で慰めた。

『わたしとあなたとは二年にもなる仲ぢやありませんか。(10）散々苦勞をし拔いて、やうやく此うした晴れた身になり、二人一所に遙々とまだ會はぬお父さんお母さんのお目に掛らうと樂しんで、もういよいよこの大河を越へればお國の地方へ着くといふ、一生一度の喜びなのに、どうなすつたんですよ、あなた、そんなに悲觀してゐるなんて、何かわけがあるんですね。夫婦の仲ぢやありませんか、死ぬまで一所の二人の仲ですもの、何んなことでも相談して見やうぢやありませんか。どうぞね、あなた」(鈴木眞海『鴛鴦譜　外三種』(支那文獻刊行會、1925）281～283頁参照。)

31　宮原民平「杜十娘怒沈百寶箱」註（頭註94)『今古奇觀（支那文學大觀第11卷)』80頁参照。

32　鈴木眞海『剪燈新話』(支那文獻刊行會、1925)、同氏『瀟湘録　外三種』(支那文獻刊行會、1925）同氏『頭註國譯本草綱目（１～15)』(春陽堂書店、1929-1934）参照。

33　鈴木眞海『燕山外史』(支那文獻刊行會、1925）参照。

34　鈴木眞海『鴛鴦譜　外三種』(支那文獻刊行會、1925)「凡例」1頁参照。

35　宮原民平『北京聲音辨』(東洋協會植民專門學校、1916)、同氏『支那時文一斑』(文求堂書店、1921)、同氏『支那時文教程』(文求堂、1926)、同氏『支那國音字典』(文求堂、1936)、同氏『初等支那語教科書』(東京開成館、1938)、同氏『最新時文讀本』(東京開成館、1939）等参照。

36　宮原民平訳註『西廂記』(国民文庫刊行會 1921)、同氏『還魂記』(同、1921)、同氏『燕子箋』(同、1923)、同氏『漢宮秋』(同、1924）参照。

37　宮原民平『古典劇大系（第16卷 支那篇)』(近代社、1925）参照。

38　宮原民平「支那研究の一方面」『拓殖文化』(29号、1927)。なお本文は拓殖大学創立百年史編纂室編『宮原民平拓大風支那学の開祖』(拓殖大学、2001）450頁より引用。

39　東亜同文書院大学は、中華民国上海市に本部を置いていた日本の私立大学。1939年に設置され、1945年に廃止された。三好章『アジアを見る眼：東亜同文書院の中国研究』(あるむ、2018)、郭晶『东亚同文书院研究』(中國社会科学出版社、2016)、藤田佳久『日中に懸ける：東亜同文書院の群像』(中日新聞社、2012)、西所正道「『上海東亜同文書院』風雲録：日中共存を追い続けた5000人のエリートたち」(角川書店、2001）参照。

40　今泉潤太郎「資料による中日大辞典編纂所の歴史（1～7)」(『日中語彙研究』１～４号・７・８・11、2012～15・18～19・22号、2012～15・2018～19・2022）参照。

41　萩尾長一郎「話本について（１～３)」(『福岡大学研究所報』５・８・11号、1964～68)、同氏「中国旧白話小

説語彙（「話本について」解題）（４～11）」（『福岡大学研究所報』13・14・16・18・22・26・28・37・41号、1970～79）、同氏「改題 中国旧白話小説戯曲語彙（13～19）（『福岡大学総合研究所報』57・61・79・89・115・123・136号、1981～1991」参照。

42　建國大學は、満州国の首都・新京にあった国務院直轄の国立大学。1938年（康徳５年）５月に開学し、1945年（康徳12年）８月に閉学した。源元一郎『満洲国立建国大学：五族協和の魁』（鳥影社、2021）、山根幸夫『建国大学の研究：日本帝国主義の一断面』（汲古書院、2003）、宮沢恵理子『建国大学と民族協和』（風間書房、1997）等参照。

43　「萩尾長一郎教授略歴・著作目録」（『福岡大學人文論叢』10巻２号、1978）参照。

44　星野蘇山らによる桃義會の翻訳は、拙稿「近代日本に於ける中国白話小説「三言」所収篇の受容について――新たに発見された桃義會(1924)の翻訳事例を中心として」（『国際文化研究科論集』20号、2012）、井上紅梅による翻訳と『新譯今古奇觀』については、同じく拙稿「井上紅梅の研究――彼の生涯と受容史から見たその業績を中心として」『（東アジア海域叢書）小説・芸能から見た海域交流』（汲古書院、2010）を参照。

45　近藤總草による翻訳は、同氏「莊子とその妻」（『滿蒙』11年５号）、同氏「因果はめぐる」（『滿蒙』11年６号）、同氏「煉炭美人局」（『滿蒙』11年７号）、同氏「ある殺人事件」（『滿蒙』11年11号、何れも1930）及び同氏『滿洲支那傳説物語』（越後屋書房、1941）がある。詳細は拙稿「近代日本に於ける『警世通言』卷二「莊子休鼓盆成大道」の受容について ――発見された近藤總草訳「莊子とその妻」（1930）を中心として」（『国際文化研究科論集』29号、2021）参照。

46　宮原民平「支那研究の一方面」『拓殖文化』（29号、1927）なお本文は、拓殖大学創立百年史編纂室編『宮原民平　拓大風支那学の開祖』（拓殖大学、2001）450頁より引用。

47　今東光の略歴については、矢野隆司「今東光　関西学院と東光の生涯」（『関西学院史紀要』11号、2005）参照。

（附記）　本論文は、文部科学省科学研究費補助金（基盤研究Ｃ）「中国通俗小説受容の完全な体系化に向けた研究――民間翻訳の本格導入による多面的解析」の研究成果の一部である。

（勝山　稔　東北大学大学院国際文化研究科アジア・アフリカ研究講座教授）